



台湾と中国 兩岸三通の旅①

近くて遠いと思われる台湾と中国。

だが実際に行き来してみるとその複雑な歴史、文化の近さなどがよく分かってとても面白い！

台湾は好きだが、中国はちょっと、と言わずに、離島を挟んだ兩岸の旅に是非出てほしい！

文・写真 / 須賀 努



須賀 努 (すがつとむ)

1961年東京生まれ。東京外国語大学中国語学科卒。コラムニスト / アジアンウォッチャー。金融機関で上海留学1年、台湾出向2年、香港9年、北京5年の駐在経験あり。現在はアジア各地をほっつき歩き、コラム執筆。お茶をキーワードにした「茶旅」も敢行。

ここ数年、中国人旅行者が大挙して日本にやってくるようになった。東京、北海道、京都などの有名観光地だけでなく、日本各地を訪れるようになってきており、筆者も「こんなところにまで中国人」と驚くこともしばしばだ。これは爆買による経済効果だけではなく、『日本の良い点も悪い点も、様々な面を知ってもらう非常に良い機会』になっており、真に歓迎すべきことだ。

ところが一方で、ここ数年、日本人が中国旅行に行かなくなってしまった。政治的な問題をはじめ、大気汚染や食の安全など、理由を挙げればきりが無いが、だからといって行かなければ、どんどん隣の国が分からなくなってしまう。これはとても残念なことであり、また将来危惧すべきことではないだろうか。

そんな日本人旅行者が中国ではなくて目指す場所、として近年注目されているのが台湾だ。食べ物も美味しいし、日本人も何となく優しく、居心地がよいという。そこで今回は台湾と対岸にある福建省を、その海峡にある離島を含めて旅してみる、という提案を試みたい。福建省は台湾に近いことから、北京や上海など、我々が一般的に想像する中国とはまた一味違った柔らかなさがあり、更に台湾側の離島では、そののどかなムードの中で、ゆったりとした時間が過ごせる。そしてそこには中台の歴史も秘められている。是非様々な中国にアプローチしてもらいたい。

また私は「茶旅」と称するお茶をキーワード

ドに茶園を訪ねる旅を始めて、早15年。これまで中国最大の茶産地、福建省には何度も訪れ、また台湾の茶畑にも何度も足を運んできた。福建省と台湾、ある意味でお茶の原点であるこの2つは海峡を挟んで切ってもきれない関係にあり、当然お茶についての繋がりも深い。毎回同じルートでは面白くないので、今回は台湾台北から金門島経由で鉄観音の産地、安溪へ行き、福州の馬尾から馬祖経由で台北に戻るといふ、ちょっと冒険的なルートを選択、台湾、中国お茶事情にも触れてみたいと思う。

昔の最前線基地 金門島

金門島は福建省アモイ市とは目と鼻の先にある島だが、現在は台湾が管轄している。台北の松山飛行場から国内線のフライトで小1時間。鉄道で台南日帰り食い倒れツアーに行くより近いかもしれない。空港から路線バスに乗ると、のどかな島の風景を目にすることができ、所々に軍の施設や現役の兵士の姿も目に入る。そう、以前この島は中台緊張の時代、台湾側の最前線基地だったのだ。台湾人の男子には兵役の義務があるが、『俺は1年で軍隊を卒業した』という知り合いは、大抵が金門か馬祖という、最前線で勤務した連中だった。

第二次大戦後、日本軍がいなくなったあと、国民党と共産党が争った。いわゆる国共内戦の中、激しく戦火を交えた場所の1つが金門島である。『この命、義に捧ぐー台湾

を救った陸軍中将根本博の奇跡』（門田隆将著）で近年日本でも知られるようになったが、1949年の古寧頭戦役で国民党が勝利したことにより、共産党の台湾攻略が失敗に終わり、今日の状態が続いているということは、まさに歴史だ。

この伝説的な戦いに蒋介石から依頼された旧日本軍の将兵が大きな役割を果たしていたとすれば、我々日本人にとっても興味深い逸話になる。島には古寧頭戦史館で大々的に国民党の勝利を宣伝する他、トーチカ跡などが観光資源として残されている。中国大陸から来る大勢の観光客が、この歴史を眺めている姿は何とも言えず面白い。

また島の中心の街、金城の雰囲気は30年前の台北に酷似しており、言葉では表現できないが、ちょっと薄暗い、独特の空気がある。ある意味で映画のセットのようなところ。台湾のどこの街にもある演劇の舞台もある。いいなあ、ここで大盛りの魯肉飯を食べていると、忘れていたものが様々に蘇る。

尚フェリーターミナルから15分ぐらい歩いていくと、古めかしい家が続く。水頭村、ここは古民家が集まる村だった。確かに村自体が保存地区になっているのか、皆古く、その建物が何とも面白い。まるで中国と西洋を折衷したような造りになっている。清末から民国30年頃までというから、今から70-100年前、南洋に移民した華僑が故郷に建てたものだという。



安溪 茶畑を眺める張さん。

しかし人は殆ど歩いていない。というより不在のように見えた。この古民家は民宿になっているところがいくつもあるが、門は閉じられており、事前予約は必須のようだ。100年前にタイムスリップするべく、次回はこちらと予約して、一度は泊まってみよう。

金門からアモイへ渡る

水頭碼頭までバスに乗れば、アモイ行きフェリーに乗れる。近年便数が格段に増えている印象がある。30分から1時間おきに1本、船があるというのはいくつもの頻度ではないか。恐らくは台湾と福建を行き来するビジネススマンが増えているのだろう。運び屋もあるかもしれない。

実は21世紀最初の日である2001年1月1日、筆者は偶然にもアモイの港に立っていた。それは初めての茶旅のために茶産地武夷山を訪れた帰り、港には朝から大勢の人が詰めかけ、非常な熱気に包まれていた。中国の正月は春節、一体何の祭りなのか、さっぱり分からない中、人々の後ろに立ち、ずっと海を眺めていたのを鮮明に覚えている。その日がいわゆる中国と台湾の公式の通行が始まる歴史的な日だったという事は後から知った。小三通と呼ばれ、台湾の金門島から、アモイへの直行船第一便を皆が待ち望んでいたのだ。私も歴史と呼ばれている、21世紀は福建、台湾との縁が強くなる、そう感じた日でもあり、今やそれが現実になってきている。

その後三通と呼ばれる「通商」「通航」「通郵」が2008年の馬英九政権誕生後に実現し、今では船便だけでなく、定期航空便が中国各地と台湾各地を結んでいる。一時は中国が台湾を経済的に飲み込むのではないかと、と言われていたが、昨年3月に起こった台湾の大学生による立法院占拠などにより、一般台湾民衆の複雑な気持ちが変わり、中国と台湾の関係は一筋縄ではいかない、ということを実感して見せた。

現在中国、台湾双方の金門訪問者の内、半数以上はそのまま台北やアモイへ抜けていくといい、単なる中継基地としてこの島を使っている。フェリーターミナルには台湾各航空会社のカウンターがあり、そこでチケットインするとそのままシャトルバスで空港に運ばれ、2時間以内に台北に降り立つことができる。昔戦火を交えた島が今や両者の中継点、さすが中華な世界。

鉄観音茶の産地、安溪

金門から2年前に乗った時には、アモイの中心街に近い東渡フェリーターミナルに着いたのだが、今は殆どのフェリーがアモイの裏側、五通フェリーターミナルに着いてしまっている。五通まで金門から僅か30分、その近さが実感できる。ここからアモイ市内へ行かず、同安という街まで行ってバスに乗れば、目指す安溪大坪に行けると聞き、タクシィで急ぐが渋滞にハマる。中国は地方都市でも渋滞がすごい。



自ら作った野菜をシンプルに食べる



古寧頭戰場

なんとバスの発車5分前に奇跡的に同安のバスターミナル前に到着した。だがそこにいた職員が『え、バスはもう出たよ！でも急いでいったら、道で捕まえられるかも？』と言っていないか。えー、何だそれ、まだ出発時刻じゃないぞ、などと思ってみても事態は変わらないので、荷物を引き摺り言われた通り走ってみた。道の角を曲がると、ちょうど小型バスが1台、ひよろひよろと頭を出してきた。『大坪行か？』と聞くと何とそうかどうかで、急いで乗り込む。まさに奇跡的に間に合った。何と今年開通したこの路線バスの運賃は僅か3元、もしアモイから路線バスで同安に来れば2元だから合計5元で、鉄観音茶を拝める、これは素晴らしい。

バスに揺られて山道を1時間半、終点で降りてキョロキョロしているとバスの運転手が『茶飲むか？』と声を掛けてくれたので、休憩室でご馳走になる。運ちゃんとお茶を飲んでみると、おじさんがご飯の椀を持って食べながら部屋に入ってきた。茶農家では立って食べている人が多い。ちょうど昼時、『うちで飯食ってけ？』と誘ってくれる。普通なら遠慮するところだが、何となくこの辺に来ると、お世話になろうかなと思ってしまうところが面白い。運ちゃんも、それが良い、という顔をしたので、おじさんに付いていき、ご馳走になる。

それから過去2回訪問している張さんの家へ行く。ここで数日を過ごすのが、私の何よりの楽しみだ。朝は鳥のさえずりと共に起き、夜は夕飯を食べたら早くに寝てしまう。遠く

まで広がる山の茶畑を眺めながら、新鮮な空気を吸い、美味しい出来立てのお茶を飲む。

ここではインターネットも繋がらない。食事でも自分で作ったキャベツや芋など農産物など使わない野菜が中心、そして胃に優しい粥などと一緒に食べると、心も体も癒されてくる。

中国にもこんなところがあるんだ、都会に疲れた人間にお勧めの場所であるが、人の家に泊めてもらうには、長い人間関係の構築が必要であることは言うまでもない。

張さんは68歳、鉄観音茶作り一筋50年以上という大ベテラン。今や殆どが機械製造の中、張さんは一人で淡々と手を動かしてお茶を作り続けている。周囲の村の同僚たちは皆既に引退。如何に早く、如何に効率的に物を作り売り捌くかという『金儲け至上主義』の現代中国で、このような貴重なお茶をこの村で作るのは彼一人となってしまうた。

張さんの製茶作業を見ていると、まるで歌舞伎の型のように洗練された動きがあり、床に落ちた茶葉を履く所作は、まるで相撲の呼出のように見え、何とも見事、見とれてしまう。製茶作業見学の条件は『絶対に話しかけないこと』なのだ。それほどに集中力が問われ、もし少しでも気を抜くと、よい茶はできない。奥さんが摘んできた茶葉を天日で干してから最後の仕上げまで、およそ30数時間。寝る時間も殆どない、完全なる真剣勝負。私も朝6時から夕方6時まで、黙ってその作業を眺めている。しかし張さんの年齢、体力を考えれば、一人芝居もそろそろ幕が閉じられそう。



製茶する張さん



金門島 金城の舞台

